

週日の説教

金 大烈 神父 2011年6月24日(金)

《私たちの名は“神様の愛される子供”》

「虎が死んだら皮を残し、人が死んだら名を残す」ということわざがあります。個々に知っている人ならば、私達が別れていても一緒にいてもその名を思い浮かべると、その人の顔も全てが思い描けます。日本の女性の場合は結婚すると苗字が変わりますよね。ですから実際に自分の名として持っているのはその下の名前です。

皆様、親からいただいたその名前は、一生持っていることとなります。そして、ご自分でもこの名は私の名前として意識を強く持っています。

今日の福音(ルカ1・57-66、80)で、子供の名前のことでヨハネにするとカザカリアにとかで口争いがあったのですが、結局生まれてきた男の子はヨハネという名前をもらって一生生きたわけです。また今日誕生日を迎えている兄弟がいますが、苗字より下の名前の方が本当の名と言えるでしょう。色々な名がありますが、私達が実際にその名を聞いて名を思い起こしてその方のことを考えるのではなく、その名には色々なものが含まれているわけです。例えば、名前を聞いただけでその人は最近何々をなさった人だと直ぐに分かります。私がこの教会から離れても何かで私の名前を見つけたら私のことを思い出すでしょう。名前だけでなくどんなことが思い浮かぶでしょうか。憎らしい何かがあったことも、(笑)少なくとも、ちょっとしたありがたかったことも思い浮かぶでしょう。実際に名に含まれている大事なことは、その人の人柄だと思います。人格だと思います。ですから結局、虎は皮を残すかも知れませんが人間は自分が一生見せて来た人格が残ることだと思います。

洗礼者ヨハネと言えば、荒野での叫び声として、救い主の道を整えた方として、私たちはすぐにその人のなされたことが思い浮かびます。私たちも同じだと思います。名そのものは、表のしるしに過ぎないかも知れません。しかし、その名を通して思い浮かぶのはその人の人生全てでしょう。ですから名は大事であることを意識しなければなりません。

さあ、皆様と私と全てのカトリック信者ならば同じ名前を持っています。それは何でしょうか。この名を汚してはいけないし、いつも誇りを持ってこの名に相応しい生き方を作りあげなくてはなりません。私たちは皆“神様の愛される子供”という名前をもっています。皆様も私も“神様の子である”ことが絶対変わらない名前になるように私たちは頑張らなくてははいけないと思います。

私たちが死んでも、名を残そうとするならば、「あの人は神様の子だから、熱心な信者だから、信仰の内に何でも乗り越えようと頑張ってきた。」と言うことが大事なことだと思います。

ありがとうございました。